

Dennis と Addison の Milton 批評

—‘the Sublime’ 論を中心に—

野 村 武

【I】

17世紀末から18世紀前半にかけて、‘sublime’ とか ‘sublimity’ とする語は、Milton 批評における常套語であつた。⁽¹⁾ Lord Lyttleton は *Dialogues of the Dead* (1760) の中で Boileau と Pope に次の様な対話をさせている。「Longinus は、全ての他の作家よりも、Milton を好んだであろう。Milton は the sublime に於て Homer すら凌駕している。しかし、馬鹿げた事や、突飛な作り話に耐えられぬ批評家は、Virgil を Milton の上位に置くであろう。」と Boileau が言う。「Milton の天才は誠に偉大で sublime であるので、彼の作品は、批評の枠を越えているように思われる。彼の詩に輝やく詩の炎の、明かるくまばゆいばかりのひらめきのため、何人もその欠点を見出すことはできないであろう。」と Pope に答えさせている。⁽²⁾ Aristotle とその流れをくみ、規則を重んじた仏国の批評家達の文学理論が支配的であつた当時の英国の批評家にとつても、Milton は、規則の枠を越えた詩人に思われた。この様な批評家の中にあつて、*Paradise Lost* を取り上げ、その特質を ‘sublimity’ に置きながら、詳細な批評を加えたのは、John Dennis と Joseph Addison であつた。

Letters on Milton and Wycherley (1722?) に於て、Dennis は、それまでの彼の Milton 批評をふりかえりながら、次の様にのべている。「私はこの三十年間、たゞ一

事のために Milton を賞讃してきた。その一事とは、彼が古代人近代人の両者から the Prize of Sublimity を奪い去つたことである。」⁽³⁾ Dennis の Milton に対する賞讃は、彼の批評活動の初期から終世変わることはなかつた。彼の最初の文学批評である *Preface to The Passion of Byblis* (1662) に於て、Milton は “one of the most sublime of our English Poets” であり、*Paradise Lost* については “there is something so transcendently sublime in his first, second, and sixth Books”⁽⁴⁾ と述べて以後、彼の主要な批評論文である *Remarks on Prince Arthur* (1696)、*The Advancement and Reformation of Modern Poetry* (1701)、*The Grounds of Criticism in Poetry* (1704) に於て、Dennis は、文学批評を論じた時、常に Milton に言及し、批評活動の末期にあつても、Milton は、 “a Poet, who in sublimity has excell’d both Ancients and Moderns”⁽⁵⁾ であり、*Paradise Lost* は “unparallell’d Sublimity”⁽⁶⁾ を持つと述べ、この詩人に対する讃辞を惜しまなかつた。

Dennis に比すると、Addison の Milton 批評は、量的にはむしろ少ないかも知れない。*A Discourse on Ancient and Modern Learning* (1693?) に於て、*Paradise Lost* に言及して、Adam と Eve は全人類の先祖であるから、あらゆる読者の興味をひくと述べ、⁽⁷⁾ 1694年、彼の文学批評の習作とも言える

An Account of the Greatest English Poets に於て、"Whate'er his pen describes I more than see, /Whilst every verse arrayed in majesty, /Bold, and sublime, my whole attention draws/. And seems above the critic's nicer laws," と、Milton の詩が bold で sublime であり規則を超越していることをうたつた。その後、1712年1月5日、*The Spectator* 267号より5月3日、369号まで18回にわたつて *Paradise Lost* 批評を試みた以外には、彼の Milton への言及は、あまりみられない。そして、これら一連の *Paradise Lost* の批評の約七週間後、*The Spectator* 409号に於ては、taste を、同誌411~421号に於ては、imagination を論じた。これら三つのグループは、時間的にも近く、内容も関連しており、18回にわたる Milton 批評は、Addison が彼の批評理論を実際の作品にあてはめたものと考えてよいであろう。彼は、その中で、sublime とか sublimity とか、imagination と言う言葉を、実に頻繁に使つている。⁽⁸⁾ 279号に於て彼は次の様にのべる。

Milton's chief talent, and, indeed, his distinguishing excellence, lies in the sublimity of his thoughts. There are others of the moderns who rival him in every other part of poetry; but in the greatness of sentiments he triumphs over all the poets both modern and ancient, Homer only excepted. It is impossible for the imagination of man to distend itself with greater ideas, than those which he has laid together in his first, second, and sixth books. The seventh, which describes the creation of the world, is likewise wonderfully subli-

me, though not so apt to stir up emotion in the mind of the reader,...

Paradise Lost の主題は、詩人の思いついた "the most sublime" なものであり、⁽¹⁰⁾ 第1巻には、"instances of that sublime genius so peculiar to the author" が数多くあり、又、第10巻に於て、神の命で天使が、地球の傾斜を変える部分は、"that sublime imagination which was so peculiar to this great author" で描写されているとも述べている。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

斯様に、Dennis も Addison も Milton の特質をその sublimity に置いたのであるが、具体的に、*Paradise Lost* の中のどんな部分を sublime であるとしたのであろうか。この問題に入る前に、両者の the sublime 論を中心に、文学批評の原理を一瞥しておきたい。

[II]

Dennis は、1704年 *The Grounds of Criticism* の中で

...the Sublim is nothing else but a great Thought or great Thoughts moving the Soul from its ordinary Situation by the Enthusiasm which naturally attends them.⁽¹³⁾

と the sublime を定義している。この文中の Enthusiasm と言う語に彼の the sublime 論の特徴があるが、彼がこの様な定義を下すに到つた詩論の展開を簡単に眺めたい。⁽¹⁴⁾ Dennis の詩論は彼の倫理観と結びついていた。1698年 *The Usefulness of the Stage* に於て、彼は次の様に考えた。人生の目的は幸福の追求であり、幸福は "pleasure" に存している。幸福ならんがためには、人は大いに "please" されなければならない。人を "please" するのは "Passion"

のみである。それ故、“please”されるためには、“move”されなければならない。かくて、現世来世とも、その幸福は“Passion”にあるが、人間には、墮落以後、この世にあつては、“Passion”のみでは不十分で人間は、“reasonable creature”であるから、“Passion”は“Reason”を伴い、これと調和を保つてひきおこされねばならない。⁽¹⁵⁾三年後、*The Advancement and Reformation of Modern Poetry* に於ては、“Passion”を詩と散文を区別するものとして、次の様に詩を定義した。“Poetry is Poetry, because it is more Passionate and Sensual than Prose…Passion then, is the characteristic Mark of Poetry.”⁽¹⁶⁾そして彼はこの“Passion”を「それを感じる人によつてその原因がはつきり理解され得るもの」と「はつきり理解され得ぬもの」との二種に別け、前者を“Ordinary Passion”，後者を“Enthusiasm”又は“Enthusiastick Passion”と呼んだ。詩に於ける“Enthusiasm”とは、我々が想起する思想に附随する“Admiration”とか“Joy”とか“Terror”であると考えた。そして彼は、詩と詩人に於ける“Poetical Genius”を次の様に定義した。

Poetical Genius, in a Poem, is the true Expression of Ordinary or Enthusiastick Passions proceeding from Ideas to which it naturally belongs; and Poetical Genius, in a Poet, is the Power of expressing such Passion worthily: And the Sublime is a great Thought, express'd with the Enthusiasm that belongs to it,⁽¹⁷⁾

1704年、*The Ground of Criticism in Poetry* に於て、彼は、これら二種の“Passion”について更に詳細な説明を加え、

“Vulgar (Ordinary) Passion”とは、事物それ自体、又は、通常的生活体験の中の観念によつてひきおこされるものであり、“Enthusiastick Passion”とは、“Ideas in contemplation”又は、日常生活に属さない事物の“meditation”によつてひきおこされるものであると述べ、太陽を例にとり次の様に説明した。即ち、太陽と言う語が、日常の生活の中で、我々の心の中によびおこすものは、二フィートの円い平たい物体に過ぎない。しかし、“meditation”に於ける太陽は、光り輝やく物体であり、神聖さの最も荘嚴なイメージであり、このイメージは“Admiration”を伴うものであると。そして彼は“Admiration”の他に、“Terror”“Horror”“Joy”“Sadness”“Desire”を“Enthusiastick Passion”にあげた。続いて Dennis は、*Paradise Lost* の詩行を引用しながら、最も強烈な“Enthusiastick Passion”は、宗教的観念によつてひきおこされることを例証し、“Terror”を取り上げた時、Longinus の the sublime 論に言及して、彼が“Passion”を含まない sublimity を認めたのは、間違いであると述べている。かくて、Dennis は、詩の本質を“Passion”に求め sublimity にとつて最も大切なものは、“Admiration”と“Terror”と言う“Enthusiastick Passion”であると考えた。

次に Addison の the sublime 論に目を転じよう。彼が、天才とか詩の美しさについて語る時、そこには常に rule に対する反発と imagination の重視がみられる。「偉大な natural genius の中には」と彼は genius を論じた *The Spectator* 160号に於て語る「仏国人が *Bell Esprit* と呼んでいる天才——彼等は会話とか思考により、又、最も洗練された作家を読むことによつて磨き上

げられている——の筆致や優雅さよりも、はるかに美しい something nobly wild and extravagant がある。」芸術の規則によつてそこなわれなかつた詩人は、古代、就中、東方にいた。Vigil よりも Homer に、Homer よりも旧約聖書の中により “elevated and sublime” な詩句があると Addison は言う。Pindar の詩に於ける、豊かな想像力の生んだ the sublime を、貧弱な想像力しか持たないで、correctness や nicety にとらわれている現代の群小詩人が模倣するのは、誠に滑稽であるとも述べている。又、Milton の欠点を述べるに先立ち、同誌291号に於て、Longinus を引き合いに出しながら、rule を厳格に守る小天才の作品よりも、これを破る大天才の作品の方がはるかに好ましいと述べている。更に、imagination 論に先立つ taste を論じた1714年、同誌409号に於ては、

I must confess that I could wish there were authors of this kind, who besides the mechanical rules which a man of very little taste may discourse upon, would enter into the very spirit and soul of fine writing, and show us the several sources of that pleasure which rises in the mind upon the perusal of a noble work. Thus although in poetry it be absolutely necessary that the unities of time and place, and action, with other points of the same nature, should be thoroughly explained and understood, there is still something more essential to the art, something that elevates and astonishes the fancy, and gives a greatness of mind to the reader, which few of the critics besides Longinus have observed.

彼の批評に関するまともなものととしては、最後の著作とも見做すべき *The Spectator* 592号に於ては、rule を一つも守らない Shakespeare は、rule を批評の基準とする批評家にとっては、躓きの石であり、rule を正確に守るよりもこれを破る作家の方がより “noble” な効果——建築や彫刻にあつては “gusto grande”, 文学にあつては the sublime——を生むと述べている。このように、Addison にとつて the sublime とは、技巧とか規則によつては生れない、又これらによつてはかることもできない想像をかきたてる “something nobly wild and extravagant” であり、詩にとつて本質的なものであつた。この “something” とは、何であるかを彼は Taste 論に続く Imagination 論に於て、明らかにしようとした。

この中で、Addison は、想像の喜びを、眼前に実在する物体から生ずるものと、物体が眼前に実在しないで、彫刻や詩等によつて、記憶の中にとゞめおかれた観念がよびさまされることによつて生ずるものとの二種に分類し、前者を “the primary pleasures of the imagination”, 後者を “the secondary pleasures of the imagination” と呼んだ。そして、この両方の想像の喜びの源は “the great” “the uncommon” “the beautiful” であるとした。Imagination 論に於ては、Addison は、“sublime” と言う語は一度しか用いなかつた。それは、“the great” によつて想像を喜ばせる詩人の代表として Homer を挙げ、“In a word, Home fills his readers with sublime ideas and, I believe, has raised the imagination of all the good poets that have come after him” と述べた場合であつた。⁽¹⁸⁾この文から、“the secondary pleasures” の “the great” は詩にあつては

“the sublime”を意味すると考えてよいであろう。⁽¹⁹⁾ Addison は、第一種の想像の喜びを生む“the greatness”を次の様に説明している。

By greatness, I do not only mean the bulk of any single object, but the largeness of a whole view, considered as one entire piece. Such are the prospects of an open champaign, high rocks and precipices, or a wide expanse of waters, where we are not struck with the novelty or beauty of the sight, but with that rude kind of magnificence which appears in many of these stupendous works of nature. Our imagination loves to be filled with an object, or to grasp at anything that is too big for its capacity. We are flung into a pleasing astonishment at such unbounded views, and feel a delightful stillness and amazement in the soul at the apprehension of them.⁽²⁰⁾

かくして、Addison は、想像を喜ばせる the sublime を生むのは、海や山、原野の持つ広さであり荒々しさであると考え、彼にとって、the sublime とは先ず第一に「想像の喜び」の源であり、物理的空間的な magnitude とか immensity がその重要な要素になっていた。それでは、Dennis と Addison の上述の様な the sublime の理論は、彼等の Milton 批評にどのように現われているであろうか。

[III]

Dennis は *Letters on Milton and Wycherley* (1722?) に於て、暗に Addison を指しながら、Dennis が *Paradise Lost* を

批評した後で、Addison が断りもなく、同じ箇所を取り上げ、しかも Milton を正当に⁽²¹⁾ 評価しなかつたと非難しているが、両者が、その sublimity 故に、引用して批評を加えた共通の箇所がいくつか見出される。⁽²²⁾ ことに、これらの二、三の例を取り上げ両者の加えた批評を比較してみたい。

「その greatness によつてのみ、読者を感動させ刺激するイメージを見せよう」と述べて Dennis は、*Paradise Lost* 第 1 巻の Satan の次の描写を引用する。

: hee above the rest

In shape and gesture proudly eminent
Stood like a Tower; his form had yet
not lost

All her Original brightness; nor appeared

Less then Arch-Angel ruind, and th'excess

Of Glory obscur'd: As when the Sun
new ris'n

Looks through the Horizontal misty
Air

Shorn of his Beams; or from behind
the Moon

In dim Eclips disastrous twilight
sheds

On half the Nations, and with fear
of change

Perplexes Monarchs. Dark'nd so, yet
shon

Above them all th'arch-angel: but his
face

Deep scarrs of Thunder had intrencht,⁽²³⁾

Dennis によれば、この詩行の詩魂“Spirit”の偉大さは、“Greatness of the Ideas”から生じ、“Greatness of the Ideas”

とは、詩人の心に鼓吹された “Admiration” と “noble Pride” が表現されたものである。結末に到つて、それまで、“stately and majestic” であつた詩魂は “vehement” となる。何となれば、「しかしその顔を富の深き癩痕は刻み⁽²⁴⁾」と言う詩行の詩魂を生む idea は great のみならず terrible であり、強烈な苦惱の passion は vehemence をもつて表現されるからと Dennis は説明し、“The Reader cannot but observe of himself, that the greatest of these noble Ideas is taken from Religion.” と結んでいる。⁽²⁵⁾ 一方同じ箇所を Addison は、“There is no single passage in the whole poem worked up to a greater sublimity.” と評している。⁽²⁶⁾

次に第七巻に於て、天地創造の命をうけた Messiah が、「渾沌を見下し、混乱をしづめ、その中に下りて、天地創造の最初の輪郭を引く」次の描写を取り上げよう。

Heav'n op'nd wide
 Her ever during Gates, Harmonious
 sound
 On gold'n Hinges moving, to let forth
 The King of Glorie, in his powerful
 Word
 And Spirit coming to create new
 World.
 On heav'nly ground they stood, and
 from the shore
 They viewd the vast immeasurable
 Abyss
 Outrageous as a Sea, dark, wasteful,
 wilde,
 Up from the bottom turnd by furious
 windes
 And surging waves, as Mountains to
 assault

Heav'ns highth, and with the Center
 mix the Pole.

Silence, ye troubl'd waves, and thou
 Deep, peace,

Said then th'Omnific Word, your dis-
 cord end:

• • • •
 One foot he centerd, and the other
 turnd

Round through the vast profunditie
 obscure,

And said, Thus farr extend, thus farr
 thy bounds,

This be thy just Circumference, O
 World.⁽²⁷⁾

Dennis は、この部分を “'tis Plain, that Milton owes this Greatness, and this Elevation, to the excellence of his Religion.” と評し、⁽²⁸⁾ Addison は、“I do not know anything in the whole poem more sublime.” と述べている。⁽²⁹⁾

次に、Dennis も Addison も第3巻の Satan の新世界への探検を取り上げた。Dennis は、Satan が地球に近づき、太陽を見る部分を取り上げ、“Enthusiasm of Admiration” が、太陽とか星の様な自然界の物体⁽³⁰⁾によつてひきおこされると述べている。Addison は、Satan が混沌とした地球の周辺をさまよう描写を “His roaming upon the frontiers of the creation, between that mass which was wrought into a world, and that shapeless, unformed heap of materials, which still lay in chaos and confusion, strikes the imagination with something astonishingly great and wild.” と評している。⁽³¹⁾

あえて更に二、三の例をつけ加えよう。第4巻31行以下に於て、Satan が、自分の過

去をふりかえり、苛責にせめられつゝ怨みをこめて太陽へ呼びかける部分、第7巻の94行以下、Adamが、陽は未だ高いから、天地創造の話をもつとしてくれるよう天使 Raphaelに懇願する箇所⁽³²⁾、第5巻265-287行に於て、神の御心をAdamとEveに伝えるべく命をうけた Raphaelが地球に到着する描写⁽³⁴⁾、Dennisは、これらを取り上げ、太陽とか天使と云う觀念が、読者を神の概念に導き、“Enthusiasm of Admiration”をひきおこすにふさわしいと述べている。

Addisonは、天地創造の仕事が完成し、Messiahが、満足げに新世界を見下し、万物が喜びにひたり、神の御子が、喜び歌う第7巻550-568行の描写には、“something inexpressively sublime”⁽³⁵⁾があり、第一巻のPandaemonium 建立の描写(710-712行、726-730行)、Satanが居並ぶ墮落天使を見下す場面(567-573行)等は、“wonderfully sublime”であり、“sublime genius so peculiar to the author”⁽³⁶⁾の例であると述べている。

これまで挙げてきた例によつてわかるように、Dennisの*Paradise Lost* 批評は、“Enthusiastick Passion”を生む觀念は宗教的題材から取られるべきであるとする彼の理論の実証であつた。彼自身の言葉を借りれば、“Ideas that either shew the Attributes of the Divinity, or relate to his Worship”こそ“Enthusiastick Passion”を生むに最もふさわしいものであり、その筆頭に神が、続いて、天使、奇蹟、太陽、月等があつた。一方、Addisonがsublimeであると評する箇所は、彼がTaste論やGenius論で用いた“something nobly wild and extravagant,” “something that elevates and astonishes the fancy”を含み、Imagination論に於て、想像の第一

種の喜びの the great の源としてあげた、大自然の広大さや、荒々しさを含んで、読者の像想をわきた⁽³⁷⁾せ、喜ばせる箇所であつた。

[IV]

これまで sublime 論を中心に Dennis と Addison の Milton 批評を比較してきたのであるが、両者の間には、大きな二つの相異点がある。その一つは、Dennis が sublimity の本質を passion に置いたのに対し、Addison は、passion は sublimity を生気づけるものであるが、それに必要不可欠なものではないと考えたことであつた。彼は、第7巻の批評の冒頭で、第6巻を荒れ狂う海に、第7巻を静かな海にたとえて、pathetic でない sublimity に満ちた巻であると述べている⁽³⁸⁾。

他の相異点は、art とか rule と云う面より見た Milton に対する両者の見方についてである。Dennis が詩や passion について語る時、殆んど常に rule や order の重視がみられ、Addison の場合は、rule の破棄と結びついていた。Dennis にとつて Milton は “one of the greatest and most daring Genius's that has appear'd” であつたが、*Paradise Lost* は、“the most lofty, but most irregular Poem”⁽³⁹⁾ であつた。全体としては、Dennis は、Milton よりも Virgil を上位に置いた。Milton は、Virgil に時として “Thought” と “Spirit” の点で優ることがあるが、それは、彼が宗教的題材を扱かつたと言う利点から生ずるものであると Dennis は主張する。しかも、たまたま幸運にも、彼がつかんだ宗教的題材を扱う art に欠け⁽⁴⁰⁾、Milton は、韻律の調和や、表現の美等に於て Virgil に劣つて⁽⁴¹⁾いると彼は考えた。Addison の言うように *Paradise Lost* には unity of action が

あるどころか、two actions があると彼は言う。⁽⁴²⁾Dennis にとつて規則正しく書くことは、“Morally, Decently, Justly, Naturally, Reasonably”⁽⁴³⁾ に書くことであり、“Dramatick Design cannot be gracefully executed without the Rules, and particularly without the Unities”⁽⁴⁴⁾ だと彼は述べている。Shakespeare についても、Dennis はその偉大さを認めながらも、もし彼が regularly⁽⁴⁵⁾ に書いたならば、彼の天才はより光を放ち、art と learning を持つていたならば、古代のあらゆる詩人を凌駕したであろうと嘆かざるを得なかつた。⁽⁴⁶⁾

Addison にとつては Milton は逆に art の詩人であつた。*The Spectator* 第160号天才論に於て、Shakespeare や Homer の様な rule や art を無視した natural genius に対し、Milton や Virgil を、これらに縛られ、天賦の才を十分に発揮しないで模倣の弊に落ち易い第二の種類に入れ、同誌 297 号に於て、Milton が、学識を不必要にてらうことや、異教の伝説にあまりにも度々言及すること、用語に於て専門語、古語、倒置等の多いことを非難した。

斯様な両者の rule に対する見方の相異から、次の様ないくつかの epic 論や Milton 批評の相異が派生した。Dennis は、Bossu が叙事詩論で主張したように、⁽⁴⁷⁾epic にとつて最も肝要なものは、moral であり、action や character 以前に、先ず moral が詩人の⁽⁴⁸⁾念頭になければ、fable は作れないと言う。これに対し Addison は、*Paradise Lost* 批評の最後の巻に於て、Bossu 等の批評に親しんできた人々にとつてこの詩の moral に触れなくては不満足であろうと、仏国の批評家を盲信する人々への皮肉な前置きをしてから、Bossu のように叙事詩の根本は、moral であるとは全然考えないが神への従順は、

人間の幸福を、不従順は不幸を生むことが、この詩の moral であると述べている。次に Dennis は Milton の雄大な詩魂は、彼が取りあつた宗教的主題とそれに関する観念に負うていると考え「Milton の詩的靈感は、art によつて支えられているどころか、その欠如のためにこの叙事詩の六分の一は、詩的靈感がおとろえている。なぜなら 11, 12 巻の主題は、Milton に如何なる偉大な観念も与えなかつたし、その結果、偉大な詩魂も鼓吹しなかつた」と述べている。⁽⁴⁹⁾彼は、第 10 巻 197-208 行の Adam が罪を宣告される部分を取りあげ、これは誠に “flat, low and unmusical” であると評し、Milton は、最後の二、三巻、特に最終巻に於て “the most unartful thing” を犯したと非難している。*Paradise Lost* の 8 巻までが優れているのは、神や天使や、彼等の友としての人間が神の御業を語るためであるのに、結末に到つては、天使に墮落した人間について語らせているが故に、墮落した人間からは、如何なる偉大な観念も、従つて “Enthusiasm”⁽⁵⁰⁾ も生まれないと Dennis は考えた。当然のことながら、彼は、最後の三巻を全然（上例を除いて）取り上げようとしなかつた。彼は、「叙事詩に於ける description は、必要な場合を除いては、決して成されるべきではない」と当時の批評家の多くがそうであつたように action と直接結びつかない description を軽視したが、上に見た彼の Milton 批評に、この description 軽視の考え方が反映しているように思われる。これに対し、Addison は *Paradise Lost* の action とか sentiment が Bossu や Aristotle の規則に合致している云云と言うことより以上に、この詩の美しさは “especially in the descriptive part”⁽⁵¹⁾ にあると考えたように思われる。例えば、彼は、第 2 巻、地獄門の「死」の描

写は sublime idea に満ち、第4巻、楽園の Adam と Eve は “exuberance of imagination” で描かれ、⁽⁵⁴⁾ 第7巻には無数の “beauties of description” があり、天地創造の三日目、植物が生れる部分は “all the graces that other poets have lavished on their description of the spring” を含み、読者の想像を、“a theatre equally surprising and beautiful” に導くと評している。⁽⁵⁵⁾ 又、彼は、Dennis が取り上げなかつた終りの方の巻に於ても多くの部分を引用して賞讃した。例えば、Adam と Eve が禁断の木の実を食べた時に起つた自然の慟哭は、“poetical spirit” で描かれ、⁽⁵⁶⁾ 楽園を去るよう宣告されて、Adam が幸福な過去を回顧し、神に見捨てられる淋しさをうたう部分について “Nothing can be conceived more sublime and poetical” と評している。⁽⁵⁷⁾

[V]

上述の様に Dennis は、sublimity の本質を passion に置き、詩作と批評に於て規則を重視し、Addison は、passion のない sublimity を認め、規則を軽視したが、この様な両者の相異を生んだ背景の一つとして nature という問題を取り上げてみたい。

Dennis は、*Advancement and Reformation* に於て次の様に述べている。

…Nature, taken in a stricter Sense, is nothing but that Rule and Order, and Harmony, which we find in the visible Creation. The Universe owes its admirable Beauty, to the Proportion, Situation, and Dependence of its Parts… nothing that is Irregular, as far as it is Irregular, ever was, or ever can be either Natural or Reasonable.

.....

so Poetry, which is an Imitation of Nature, must do the same Thing. It can neither have Greatness nor Real Beauty, if it swerves from the Laws which Reason severely prescribes it, and the more Irregular any Poetical Composition is the nearer it comes to Extravagance and Confusion, and to Nonsense, which is Nothing.⁽⁵⁸⁾

又、彼は、*Grounds of Criticism* に於ても同様の主旨を述べている。人間を描くにあつて nature を follow すると言う時、“particular Men” を描くのではなく、“innate Original,” “the great Universal Pattern,” “the universal Idea” を念頭に置いて描くべきであると Dennis は考えた。⁽⁵⁹⁾ 彼が、詩は imitation of nature であると定義した時の nature は、有りのまゝの自然や人間の姿ではなく、理想化され、秩序立てられた原型といつたものではないかと思われる。

Dennis にとつては、生の external nature が審美批評の対象にならなかつたのに対し、Addison にとつては、想像を喜ばせる大自然の広大な荒々しい姿こそ、sublimity をひきおこす大きな源であつたが、彼のこの様な理論の形成には、当時、流行していた “physico-theology” の思想が興つていたと思われる。彼は雄大な大自然に接すると、心の中に “delightful stillness” がわくと述べている。Milton 論に於ても彼は、荒れ狂う海は pathetic な sublimity を、静かな海は、これを含まぬ sublimity をよびおこすとのべた。彼は Imagination 論に先立つ一連の essay に於て “cheerfulness” の徳を勧めている。⁽⁶¹⁾ 神は “our uses and pleasures” のためにこの世界を作り給うたと言つてよい程に、人間を楽しませてくれる物が

この世に多く存在している。荒涼たる砂漠も岩山も、“grotesque parts of nature” さえも、我々を楽しませ、cheerfulness をもたらしてくれる。山も川も泉も“refreshing to the imagination”であり、全宇宙が“a kind of theatre, filled with objects that either raise in us pleasure, amusement, or admiration”⁽⁶²⁾であり、「善良な人の心への不断の御馳走」なのであり、「目に見ゆるものは総て喜びを、楽しみを与えてくれる。」⁽⁶³⁾と彼は述べている。又、*The Tatler* 119号に於て、彼は自然界の minuteness より immensity により多くの喜びを感じずると述べているが、彼は宇宙の immensity は神の存在の一つの証であると考えた。Newton の言うように、無限の空間は、“the sensorium of the Godhead” と呼ぶにふさわしく、⁽⁶⁴⁾有限の世界に生きる人間に対し、神は“eternity”と“immensity”に存在していると彼は言う。⁽⁶⁵⁾又、*The Guardian* 103号(1713年)に於ては、1680年に現われた彗星に言及して、広大な宇宙の神秘とその創造主に対して深い畏怖の念をあらわしている。Tuveson の言うように Addison にとつて imagination は「目的と価値を持った生ある世界に属したいと云う精神的必要と欲求を持つ人間を、異質で、非人格的で、遠くへだたり、人間を脅やかすように見え始めた宇宙に融和させる一手段として役立った。」⁽⁶⁶⁾広大な大自然や宇宙に接し、そこに神の姿を見て、彼は、“admiration”や“amazement”と共に、“complacency”を、心の安らぎをおぼえた。この様な思想が、Addison の the sublime 論の中に入っていると考えられるのであるまいか。

[VI]

啓蒙の批評家達が、想像とか天才について

論ずる時、彼等が直面した大きな問題は、当時支配的であつた人間性不変説と経験論との矛盾を如何に解決するかと言うことであつた。⁽⁶⁷⁾Dennis は、“Innate Idea”は存在せず、人間性と“the Springs of Passion”は万人に同じであり、⁽⁶⁸⁾想像力と判断力も、⁽⁶⁹⁾万古不変であると述べている。同様に Addison も、“Human nature is the same in all reasonable creatures”と述べ、⁽⁷¹⁾視覚を通るもの以外には、如何なるイメージも想像することは不可能であると考えた。⁽⁷²⁾両者共、このような前提に立ちながら、天才や想像力について大いに論じたのであつた。Dennis は、偉大な作品の美しさを“Passion”によつて説明しようと試み、⁽⁷³⁾sublimityにとつて最も大切なものは、“Enthusiastick Passion”であると考えた。一方、Addison にとつて sublimity とは、何よりも先ず、想像の喜びを与えるものであり、詩の創作と鑑賞には、想像力が最も大切であると主張した。Imagination 論を結ぶにあつて *The Spectator* 421号の中で彼は次の様に言う。

It is this talent of affecting the imagination, that gives an embellishment to good sense, and makes one man's composition more agreeable than another's. It sets off all writings in general, but is the very life and highest perfection of poetry. Where it shines in an eminent degree, it has preserved several poems for many ages, that have nothing else to recommend them; and where all the other beauties are present, the work appears dry and insipid if this single one be wanting. It has something in it like creation.

Dennis にとつて想像力とは、*Remarks*

upon the Dunciad に於て、鷹狩りにたとえて説明したように、記憶の中からイメージを選び出す能力を意味したが、Addisonにとつても想像力とは記憶の中に蓄積されたイメージを“alter and compound”する能力であつた。⁽⁷⁵⁾しかし、この想像力の相異に、Addisonは、人間性不変説と経験論との矛盾の解決点を見出したと思われる。読者が、同じ詩句を読んで異つた印象を受けるのは、読者の想像力の相異か、又は、同じ言葉に対して読者が異つた観念を結びつけるかのいずれかから起因するであろうと彼は述べ、又、詩作に於ける想像力の相異は、“perfection in the soul”か“texture in the brain”の個人差によるのであるかを詮索するのは無駄であるが、詩人は、哲学者の理性に於けるように、想像力を涵養しなければならぬと強調している。⁽⁷⁷⁾

Havensの言うように、Paradise Lostの最初の偉大な擁護者はAddisonではなくDennisであつた。⁽⁷⁸⁾Dennisは、又、Sublimityと言う見地からMiltonに詳細な批評を加えた最初の人であつた。Rymer派に属しruleを重視した批評家の例と見做されているDennisが専らParadise Lostの美を詳述したのに対し、規則を標準としたあらさがし批評を嫌つたAddisonが、Milton批評にあつて、HomerやVirgilと比較し、Bossuの因襲的な方法を踏襲しているのは皮肉である、Hookerは述べている。⁽⁷⁹⁾又、Tuvesonも、AddisonのMilton批評は「ジャンルのため客観的に定められた規則による批評の伝統」の枠の中にとゞまつていると言う。⁽⁸⁰⁾成程、Addisonが最初の6巻に於てParadise Lostの長所と欠点を、AristotleやBossuの詩論に照し合わせながら、挙げて行つた方法は、conventionalな批評の方法であつた。しかし、これは、

Paradise Lostが“to be beautiful in general”⁽⁸¹⁾であること示すためであつて、Addisonにとつてより重要であつたことは、彼が12巻の夫々の中にある“particular beauties”⁽⁸²⁾を取り上げ、読者に示すことであつたと思われる。The Spectator 416号に於て、詩を味わうには、外界から受けるイメージをとゞめておくために想像力は豊かで、表現の適切さを知るために判断力は鋭くなければならぬと述べ続いて“A man who is deficient in either of these respects, though he may receive the general notion of a description, can never see distinctly all its particular beauties”と述べている。Hookerの言う様にDennisのParadise Lostの美に対する感覚は優れており、彼は“Passion”と言う心理学的基礎にたつて批評を加えた最初の人であつた。しかし、我々がDennisのMilton批評を読んで、何か一種の偏狭さと、lyricalな描写に対する趣味の欠如を感じるのは、彼が、余りにも“Passion”を強調し過ぎ、しかもこれを生むものを宗教的な観念に限定したためであろうか。Dennisは、Addisonが大いに賞讃したEveに対するAdamの深い愛情を表わしている場所、例えば、第9巻に於て、離れて働くと言つてきかぬEveを見送るAdamのまなざし、彼女の帰りを待ちわびるAdamの焦燥と、淋しさをまぎらわす慰み事、Eveが罪を犯したことを知つて、“Flesh of my Flesh, Bone of my Bone”と呼ぶEveと共に滅びようと決意するAdam⁽⁸³⁾の激情的な言葉、或は又、第11巻に於て、彼等が犯した罪のために人類にふりかゝつた不幸に接した時のAdamの苦惱⁽⁸⁴⁾、Addisonが誠にnobleであるほめたゝえるParadise Lostの終末部⁽⁸⁵⁾—この様な描写を味わう感覚をDennisは欠いていた。彼は、“Pas-

sion”論に基いた sublimity の見地から Milton を批評し、Milton は規則から逸脱することによつて、叙事詩の目的によりよくかなうことができた⁽⁸⁶⁾と述べながら、彼は、やはり rule とか art の枠の中にあつて、その Milton 批評には、限界があつたと思われる。これに対し Addison にとつて批評の基準とは、“unities of time, place and action”と言つたような客観的な規則ではなく、作品と読者との間の主観的な反応—“taste”⁽⁸⁷⁾—であつた。作品が Aristotle や Bos-su の理論に合っているか否かと言うことより、詩の鑑賞に必要なことは、その “the very spirit and soul” に入り、想像を喜ばせる ‘purple passage’ を味わうことであつた。Dennis の Milton 批評に較べると Addison のそれは、全体として眺めた時一歩時代を先んじていたと考へてよいのではあるまいか。

註

- (1) Cf. James Thorpe, (ed) *Milton Criticism: Selections from Four Centuries* (London: Routledge and Kegan Paul, 1956) p. 6.
- (2) Raymond Dexter Havens, *The Influence of Milton on English Poetry* (Cambridge: Harvard University Press, 1922) pp. 21 f. Cf. also Andrew Marvell, *On Paradise Lost* (1674); John Toland, *Life of John Milton* (1698). Thorpe, *op. cit.*, pp. 336 and 341.
- (3) Edward Niles Hooker (ed), *The Critical Works of John Dennis*, 2 vols., (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1939 and 1943) II, 221.
- (4) *Ibid.*, I, 4.
- (5) *Remarks on Pope's Homer* (1717),

Ibid., II, 120.

- (6) *Preface to the Original Letters* (1721) *Ibid.*, II, 414f. Cf. also *Letters on Milton and Wycherley* (1722?) *Ibid.*, II, 224; *Of Simpricity in Poetical Compositions* (1711, pub. 1721) *Ibid.*, II, 40; *Reflections on An Essay upon Criticism* (1711) *Ibid.*, I, 400, 408.
- (7) *Addison's Works*, 6 vols (London; 1854) “Bohn's British Classics.” V, 221 f.
- (8) *Ibid.*, I, 24.
- (9) ‘sublime’ ‘sublimity’ と言う語は、計約 20 回、‘imagination’ ‘imagined’ は、計約 30 回現われる。
- (10) *The Spectator*, No. 333.
- (11) *Ibid.*, No. 303.
- (12) *Ibid.*, No. 357.
- (13) Hooker, I, 359.
- (14) Dennis の詩論については、Hooker が Dennis 批評集に附した *Introduction* が、優れた要約である。
- (15) Hooker, I, 149 ff.
- (16) *Ibid.*, I, 215.
- (17) *Ibid.*, I, 222.
- (18) *The Spectator*, No. 417. この文のすぐ前に彼は次の様に書いている、“Reading the Iliad is like travelling through a country uninhabited, where the fancy is entertained with a thousand savage prospects of vast deserts, wide uncultivated marshes, huge forests, misshapen rocks and precipices... Homer is in his province when he is describing a battle or a multitude, a hero or a god... Homer's persons are most of them god-like and terrible.
- (19) Monk は、Addison が Imagination

- papers に於て, “sublimity” の代りに “greatness” と言う語を用いたのは, “its association with rhetoric and purely critical writings” の故であろうと言っている。Samuel H. Monk, *The Sublime* (The University of Michigan Press, 1960) p. 57.
- (20) *The Spectator*, No. 412.
- (21) Hooker, II, 221 f.
- (22) Cf. *Ibid.*, I, 513. *Notes*.
- (23) *P. L.* I, 589-601
- (24) 訳詩は藤井武「樂園喪失」(岩波文庫)による。
- (25) *Advancement and Reformation of Modern Poetry*. Hooker, I, 219 f.
- (26) *The Spectator*, No. 303.
- (27) II. 205-231.
- (28) *Advancement and Reformation*, Hooker, I, 274.
- (29) *The Spectator*, No. 339.
- (30) *Grounds of Criticism*, Hooker, I. 348 *P. L.*, III, 571~584.
- (31) *The Spectator*, No. 315.
- (32) *Grounds of Criticism*, Hooker, I, 348. Addisonは, Satan の太陽への呼びかけは, 誠に “bold and noble” であり, 全巻中, 彼の “the finest speech” であると評している。(*The Spectator*, 321)
- (33) *Loc. cit.* Addison は次の様に云う。 “Adam’s speech to the angel, wherein he desires an account of what had passed within the regions of nature before the creation, is very great and solemn. The following lines in which he tells him, that the day is not too far spent for him to enter upon such a subject, are exquisite in their kind.” (*The Spectator*, 339.)
- (34) Hooker, I, 347. Addison は次の様に言う。 “Raphael’s descent to the earth, with the figure of his person, is represented in very lively colours. ……After having set him forth in all his heavenly plumage, and represented him as alighting upon the earth, the poet concludes his description with a circumstance which is altogether new, and imagined with the greatest strength of fancy.” (*The Spectator*, 327)
- (35) *The Spectator*, No. 339.
- (36) *Ibid.*, No. 303.
- (37) Cf. Walter John Hipple, Jr., *The Beautiful, The Sublime, and The Picturesque in Eighteenth-Century British Aesthetic Theory* (Carbondale: The Southern Illinois University Press, 1957), p. 17.
- (38) *The Spectator*, No. 339.
- (39) *Grounds of Criticism*, Hooker, I, 333.
- (40) *Remarks upon the Dunciad* (1729), *Ibid.*, II, 367 f.
- (41) *Advancement and Reformation*, *Ibid.*, I, 271.
- (42) *Remarks upon Cato* (1713), *Ibid.*, II, 42.
- (43) *Advancement and Reformation*, *Ibid.*, I, 201.
- (44) *Characters and Conduct of Sir John Edgar* (1720), *Ibid.*, II, 195.
- (45) *Ibid.*, II, 197.
- (46) *An Essay on the Genius and Writings of Shakespeare* (1712), Ho-

- oker, II, 4 f.
- (47) Bossu, *Treatise of the Epick Poem* (London: 1695) p. 3.
- (48) *On the Moral and Conclusion of an Epick Poem* (1716, pub. 1721) Hooker, II, 110.
- (49) *Remarks upon the Dunciad*, *Ibid.*, II, 367f.
- (50) *Ground of Criticism*, *Ibid.*, I, 351.
- (51) *Remarks on Prince Arthur*, *Ibid.*, I, 142. Cf. also, I, 464 f. *Notes*.
- (52) *The Spectator*, No. 321.
- (53) *Ibid.*, No. 309.
- (54) *Ibid.*, No. 321.
- (55) *Ibid.*, No. 339. *P. L.* VII, 309-324.
Dennis もこの箇所を取り上げ, "What an Image is here again, with which none but our own Religion could have possibly supply'd him!" と評した。(Hooker, I, 275)
- (56) IX, 780-784, 997-1003, *The Spectator*, 351.
- (57) XI, 315-333, *Ibid.*, 363.
- (58) Hooker, I, 202.
- (59) *Ibid.*, I, 335.
- (60) *Reflection on An Essay upon Criticism*, (1711) *Ibid.*, I, 418.
- (61) *The Spectator*, Nos. 243, 381, 387, 393.
- (62) *Ibid.*, No. 387.
- (63) *Ibid.*, 393.
- (64) *Ibid.*, 565.
- (65) *Ibid.*, 531.
- (66) Ernest Lee Tuveson, *The Imagination as a Means of Grace* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1960), p. 97.
- (67) 加藤竜太郎, 「デニスの再評価について」, 「英語青年」 Vol. CIX-No. 5, pp. 266 f.
- (68) *Decay and Defect of Dramatick Poetry* (1725), Hooker, II, 296.
- (69) *Remarks upon Cato* (1713), *Ibid.*, II, 67 f.
- (70) *A Large Account of Taste in Poetry* (1702), *Ibid.*, I, 291.
- (71) *The Spectator*, No. 70.
- (72) *Ibid.*, No. 411.
- (73) 加藤竜太郎, *loc. cit.*
- (74) Hooker, II, 363.
- (75) *The Spectator*, Nos. 411, 416.
- (76) *Ibid.*, No. 416.
- (77) *Ibid.*, No. 417.
- (78) Havens, *op. cit.*, p. 93.
- (79) Hooker, II, CXXXIV, *Introduction*.
- (80) Tuveson, *op. cit.*, p. 81.
- (81) *The Spectator*, Nos. 303, 369.
- (82) *Ibid.*, No. 369.
- (83) *Ibid.*, No. 351.
- (84) *Ibid.*, No. 363.
- (85) *Ibid.*, No. 369.
- (86) *Grounds of Criticism*, Hooker, I, 331.
- (87) Cf. G. W. H. Atkins, *English Literary Criticism: 17th and 18th Centuries* (London: Methuen, 1954) pp. 159 f.